

子どものいる風景(1)

私をはじめて出会った冒険あそび場

小林 美実

一九七一年の夏、私はデンマークのコペンハーゲンの友人の家に滞在していた。まだドイツが東西に分れていた時である。ここから東ベルリンに入るための航空便の確認に手間どっていた。おかげで、思いがけず自由な時間ができた。嬉しかった。

友人の夫はデンマーク人で、小学一年の女の子、キヤティがいる。両親が朝出勤してしまうと、夏休

み中の彼女は、さっそく私を近所の気に入りの公園に誘った。日本語もできるキヤティは、大変心強いパートナーである。さっそく出かけた。この辺りはコペンハーゲンの郊外の新興住宅地で、どの家も広い敷地と広い平屋で、大きな窓には綺麗なレースのカーテンがかけられ、庭には花がいっぱい咲いていた。十分程歩いて行くと、妙な場所に着いた。それ



は低い土手に囲まれた建設資材置場の様な所で、その一角には粗末な木の大小の屋根が見える。奥の方には、石炭ガラらしい小山もある。木造の粗末なゲートを入ると、さっそくキャティは古自動車が何台も無造作に置かれている所に走って行って、子ども達の遊びに加わった。私はしばらくこの場所がどういう所か、見物することにした。

まず初めに、子ども達が面白そうにすべり下りている石炭ガラの小山へ、ずるずるすべりながら登った。そこから広いこの場所の全景がよく見わたせた。建設資材の残り物の様な廢材の山、その横には何とも奇妙な大小の小屋が無秩序に建っている。よく見ると、男の子達が未完成の小屋にとりついて、自分の家づくりをしている。出来上ったらしい家の屋根の上にまたがって、囲りを見まわしている子もいる。動物達がいる場所には、沢山のうさぎの入った箱型の小屋があり、青年と数人の子どもが掃除し

ている。杭につながれた七頭の山羊のうち、角をもった大きい山羊と一人の男の子が、力くらべをして押しあっている。その横を、あひるの群と、二匹の大きな犬と一緒に歩いている。古い大木を組み合わせた大きなジャングル風遊具は、その中央に大きな布の袋がさがっていて、それに乗った子ども達が、布をゆらしてはしゃいでいる。

平屋が一軒あるので行ってみると、そこは工作や作業用の道具・機材の収納場所で、机の囲りに数人の青年がいた。プレーリーダー達だった。ここで私は初めてこの様な冒険公園やガラクタ公園と、そこで働くプレーリーダーの存在を知ったのである。彼等の動きを見てみると、ほとんど子どもに指示したり、注意したりしない。火を燃やしはじめた時もないの間にかそばに来て、時々必要と思う時に手をかす。ことばが少ない。うさぎ小屋などの掃除も、彼等がやり出すと、子ども達が一緒にまねて掃除する

のだと言う。上半身裸だったりしてヒッピー風だったが、やさしい静かな青年達だった。

この様な公園、つまり訪れさえすれば、すぐ楽しく遊べる遊具が用意された整った公園とは全く違う公園では、子ども自身が遊ぶ物も遊びも、遊ぶ楽しさも、工夫し試し考えて創り出さなくてはならない。しかしそれが面白いらしい。コペンハーゲンには、この様な公園が市内にもあると言われて、それからキャティと市内の名所巡りをして、キョロキョロと辺りを見まわして歩いた。大小の公園の隅やビルの間に、高い塀や繁った木でかくされる様にしたあそび場を何ヶ所か見つけることが出来た。大人達の中には、この様な公園に「汚い、危ない」と苦情を言う者がいるとのこと。だから子ども達が安心して自分の遊びに熱中できるように、目かくしをするのだと言う。

冒険あそび場と言っても、すべて同じではない。

キャティと初めて行った所は、住宅地を造成、建設した時の資材置場や作業場だったようだ。この様な所は子ども達にとって大変刺激的で、スリルがあり、エキサイティングな遊びが創れる魅力ある場所である。それは日本の子どもにとっても同様である。その頃私の勤務する学園でも、小学校の男の子が、近所の家の建築現場に入りこんで遊ぶと言う苦情がよくよせられていた。

子どもは本来冒険大好きな冒険家ではないか。幼児だって、幼いなりに好奇心強く、立派なチャレンジャーだ。それは大人にとっていたずらとしか見えないことが多い。だから、その強いエネルギーをおさえこもうとしたり、大人の都合の良い方向へ無理にでも向けようとしがちだ。子ども自身がそのエネルギーで自分のかくれた能力に気づき、それをのびすことができるとしたら、すばらしいではないか。それを可能にする場が、冒険あそび場であり、ガラ

クタ公園なのだ。面白いと思ったのは、体力がつき、最もあばれたい児童期の子ども達がやりたがる「こわす」と言う行為を、逆に、こわれたガラクタで「つくる」と言う行為に変えたところだと思う。それが自分の家を何日もかかって作る、と言う小屋づくりのあそびである。自分の力を出しきり、試し、挑戦するということは、冒険なのだ。

いろいろな公園を見て歩いて珍しかったのは、木の間縦横にはりめぐらしたロープや網、高い木からさがった太い一本のロープ、ケーブルの様に紐につかまって木と木の間のロープを滑走するなど、当時の日本には無い「危ないあそび」の遊具(?)だった。また、すり鉢状の広い池や小高い山からカーブを描いてすべる長いすべり台、板を組みあわせていろいろな迷路の様な場所を作るものなども、結構危険で、でもどれも子ども達のあそぶ様子を見ていて面白かった。一番感心したのは、大きな住宅

団地(ここは一五〇〇所帯のマンション式だった)の中央に造られた公園で、冒険あそび場や小屋作りは勿論、自然のままの所、山、池、さらに運動のできる場(ボール、自転車など)等を備えた総合公園だった。この公園には、どの家からも自動車の走る道路を通ることなく行ける。学校も保育園も商店も同じ様に公園に隣接してある。この広い場所で遊ぶ子ども数は、どんなに多くても数百人だろう。だから本当に空間がいっぱい。その中に、ゆったりすごす親子づれや車椅子にのった人の姿もあり、気持ちやすらいだことを覚えている。

日本では、一九七四年に、鹿島研究所出版会から『新しい遊び場』と言う本が出版された。アービッド・ベンソン著、大村虔一・璋子訳のこの本には、私がコペンハーゲンで見た場所ものっている。同じ頃、日本でも冒険あそびの可能な公園が出来た。はじめての公園は、訳者の大村氏等による東京都世田

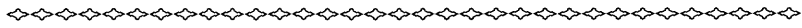
谷区の羽根木公園の一角につくられ、今も健在である。ここは沢山の太木がある斜面をうまく生かし、木の上に皆で小屋をつくり、それをあそびの拠点にしたり、いろいろな作業の出来る（時には火を燃やして食事もつくる）場所、道具小屋、動物小屋、斜面には長いロープウェー（一本の綱にしがみついて、滑車で下る）や木々の間にはられたロープわたり、大きな綱をつたって渡る、高い木から下ったロープで木に登るなど、冒険あそびがメインのあそび場になっている。入口には、自分の責任であそぶことが明記され、危険を察知したり、怪我をしない工夫をするなど、よりよく楽しくあそぶために工夫や考えることが子ども自身に要求されている。ここでも有能なプリーダーが開設時から活躍している。彼等は、あそび等のリーダーではなく、サポーター、ヘルパーに徹している。

さて、このようなあそび場は、確かに危険が多

い。デンマークでも、ここに無条件で入れるのは小学生からで、幼児は必ず大人のつきそいが必要であった。キャティと行った公園にも、母子連れが何組か来ていて、古い自動車と一緒に遊んだり、長い大きな板塀風のキャンバスに、大きなハケでダイナミックに色をぬったり、うさを抱いて歩いたりしていた。そして時には大きい子ども達の小屋づくりを見て歩いて、家の中に入れてもらったりしていた。

しかし、小学生になって突然このような公園で思いきり遊ぶことができるだろうか。キャティを見ていて感じたのは、すでに自分の責任で判断したり行動したりすることができていることや、家から外に出てすぐす時のルールがわかっていることだった。特に、冒険あそびなどには必要なことと思った。

その後、デンマークには日本の保育者のグループと訪れ、何ヶ所かの公園であそんだりした。コペン



ハーゲンには、有名な公園「チボリ」がある。チボリを皆で訪れてわかったのは、この様な娯楽性の高い、商業ベースの公園は、子どものためと言うより、大人達の公園ではないか、と言うことだった。子どもより大人の数がはるかに多く、様々なエキサイティングな乗物にのって熱狂的にはしゃぐ姿は、普段の仕事や生活のストレスを一举に解消していると思えた。多分子ども達がここに来るのは、家族と一緒に過ごす、一年のうちの一、二回の特別な日、ハレの日なのだろう。何もしなくても楽しませてもらえる。こういう日もあって良いだろう。しかし、子どもにとってそれは日常的なあそびの楽しみ方ではないと思う。デイズニーランドもその一つだろう。

さて、三十年たった今、日本もヨーロッパも子どもをとりまく状況が非常に変わった。その後デンマークに行く機会はなかったが、そこに近い北ドイ



▲ベルリンの保育園にて 暑い日のプール
とにかく広々している。子どもが少なく走りまわれる。

ツには数回行っている。ドイツは日本と同じレベルの、世界で最も少子化の国である。そして日本程ではないが、都市周辺の都市化が進み、牧場や畑、時には森も新しい住宅地や工場、官庁のエリヤになっていてがっかりする。救いは、建物をびっしり建てないこと、出来るだけ空間（空地、木や草地）を広くとること、むやみに高層ビルにしていないことである。以前から街中の道で遊ぶ子どもは少なかった。その理由はハンブルクを中心に近い古い重厚なマンションに部屋を借りてわかった。道路にそって連なって建つ建物の裏側に、建物に囲まれた広い空間があり、そこで子ども達は充分遊べるのだった。

どこに子ども達はいるのか。日本と同様、保育園、幼稚園、学校である。日本との違いは、通園パスが全く無いことと、歩くのが好きな国民性から、また道路が車道・自転車・歩道とはっきり分れていて危険が無いことで、親子が手をつなぎ、おしゃべ

りしながら登園降園する姿をよく見る。働く親の帰宅も早い。夏は日暮れもおそい。夕食の支度はごく簡単。だから芝生や草地、林、川沿いを散歩する子連れの家族や、ローラースケート・自転車・サッカーボールで遊ぶ小学生とよく出会う。しかし日中は本当に少ない。

ドイツはなかなか幼児の就園率が高くならなかった。三十年前、五十パーセント以下というのに、一クラス二十人位の子どもの数を、頑固に守っていた。

今は就園率は一〇〇パーセント近い。さらに保育園は学童クラブも兼ねていて、午後は子ども数が倍増する。と言っても、一〇〇人にはならない。今は、街中の公園より、園や学校でのあそびや生活が重要になっている。ドイツは冒険あそび場やガラクタ公園造りにそれ程熱心ではなかった。それでも園の固定遊具は、今日本でも多くなっている木造の、アスレチック風なものに早くから変わっていた。特に子

子どもを自立させ、自分の責任で考え行動することに
ついては、非常に厳しくしつけていたし、今も多少
ゆるやかになったとは言え、やはり厳しい。先生
は、四、五歳児に対しては、一緒に遊ぶことより、
よく見守る姿勢をとっている。冒険あそび風の遊具
や森で拾った棒で活発にごっこあそびをする子ども
達もいれば、一人静かにクッションに埋れて絵本に
見入る子どももいる。いろいろな子どもがいてあた
りまえ。子ども自身があそびを選び、先生もその気
持ちを尊重している。

こういう保育は、決して多人数の園では出来ない
だろう。活発でスリルに満ちた冒険あそびと同時
に、子どものいる場には静かさも必要と感じてい
る。

(元宝仙学園短期大学)



▲ハンブルクの保育園にて「仲良し」